

□ 将来のための防災教育について思うこと

大阪大学大学院人間科学研究科教授 渥美公秀

はじめに

これまで、災害が発生する度に、防災教育の重要性が叫ばれ、実際に様々な手法が開発されてきた。最近の動きを見ると、本誌も「消防科学と情報」というタイトルから、「消防防災の科学」へと名称を変更し、総合的な防災へと焦点化しているし、「地域防災」という総合情報誌も刊行されたりしている。それらには、防災に関する考え方を整理した論考もあれば、全国各地の鮮やかな取り組み事例が紹介されたりしている。将来の防災教育について考えるには、こうした論考を読んで考え、事例を1つ1つ丁寧に学ぶことが大切であることは言うまでもない。

筆者自身も、認定特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワークを通じて、「防災と言わない防災」をキャッチフレーズとした防災プログラムの開発や実践に取り組んできた。おかげさまで、日本損害保険協会や朝日新聞と共催する形で開催してきた「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」もこれまで12回を数え、昨年度は全国から2,506作品もの応募があるなど拡がりを見せている。また、筆者としては、このプログラムの意義を、従来の地域での防災訓練などと対比して論じたりもしてきた。

ただ、本稿では、こうしたこれまでの議論や事例に新たな何かをプラスするというのではなく、「将来のための」防災教育について展望を得るために、少し、原点に立ち戻ってみたいと思う。そ

して、地域で一緒に考えていくための論点をいくつか取り出してみたいと思う。

論点1：専門家から市民というベクトルの修正

防災教育というと、防災に関する専門家が知識を有し、それを市民に教育するというベクトルを考えるのは自然である。確かに、専門家は防災に関する科学的な知識を有しているだろうし、それを市民に広く普及する機会もある。しかし、専門家が有する知識が、特定の地域の現状にそのまま当てはまるとは限らない。地域には、特有の歴史、文化、習慣といった文脈がある。例えば、古くからの集落の周辺に住宅街ができて新たにその地域の住民となった人々との間の関係づくりに苦労しているという話は、決して希ではない。また、科学的知識は、確率によって表現される場合が多く、特定の地域に対するいわば特殊解は得難いという場面もある。例えば、特定の断層が原因で発生する地震について、確率で表現はできても、特定の発生日時や規模を示すことは叶わない。

ここは、市民が知恵を絞る場面ではなかろうか。もちろん、専門家の知識を学ぶにしても、一方的に教育されることを期待して待つのではなく、市民が自分の関わる地域の特性を知り、専門知識を特定の文脈において解釈し、どうすれば防災を進められるかということについて、討議を重ねていく。専門家は、単に知識を提供するという姿勢で

はなく、特定の地域の事情をできるだけ詳細に知り、市民が討議していくことを前提とした問いかけを発するようにしていく。つまり、市民こそが専門家（の知識）を活用していけるように、市民から専門家へというベクトルをしっかりと育てていく。将来の防災教育における論点の1つは、こうしたベクトルをどのように育てていくかということであろう。

論点2：「防災」リアクタンス理論

唐突ではあるが、子どもに「勉強しろ、勉強しろ」と言い続けると、子どもはかえって勉強をする気を失ってしまう。これは、人から行動を強制されると、自由を脅かされた気がして、圧力に反発しようとするからだと言明される。心理学では、自由を奪われることへの反発をリアクタンスといい、こうした説明をリアクタンス理論と呼んでいる。防災も同じ背景をもっているのではなかろうか。

防災が不要だと考える人は少ないだろう。実際、今やるべきことを10件挙げて下さいと言えば、その中に防災を含める人も多いと思われる。しかし、防災が最優先課題として挙げられるかといえ、そうでもなかろう。親の介護、商売の手続き、塾の送り迎えなどなど、人それぞれに今最も優先してやるべきことは多様である。ただ、防災が（も）大切だと思っている人々に、「防災をやるべきだ、防災をやるべきだ」と繰り返し叫んでも、かえって人々の防災活動への思いは鈍る。リアクタンスがはたらくからである。

将来の防災教育における論点の1つは、こうした現状を踏まえて、いかに市民に防災への意欲を高めてもらうかということであろう。冒頭で紹介した「防災と言わない防災」というフレーズは、この点を捉えて工夫を施していくためのキャッチフレーズである。子どもたちが街を「探検」して地図を描く。そこには防災拠点

等が含まれるように大人たちが調整する。その結果、関わった大人たちが子どもを介して防災に関する知識を得て、防災への意欲を高めるという工夫である。ここでは、子どもたちを介した地図づくりが具体的な活動となっているが、他にも様々な工夫ができるように思われる。

論点3：Lifeの確認

防災に関する議論をしていると、ふと意見のすれ違いに気づくことがある。意見が異なるという意味ではなく、むしろ意見の背後にある前提に相違を感じる場面である。具体的には、防災によって、何を守ろうとしているのかという前提である。ある人は、いのちを守ることが何より大切だと考えておられるようだし、別の人は、地域での生活を守っていくことに焦点を当てておられたりする。

英語では、いのちも、生命も、生活も、そして、人生もすべて1つの言葉—life—で表す。日本語で考えている筆者は、時々、それでは不便ではないのかななどと想像してしまうが、もちろん、英語で考える人々が誤解に戸惑い困っているという話は聞かない。それはともあれ、日本語の場合、せつかく、いのち、生命、生活、人生といった異なる言葉があるのであれば、防災教育という文脈で、少しじっくり考えてみるのも悪くはなかろう。

将来の防災教育における論点の1つは、防災によって何を守ろうとしているのかということ一度立ち止まって考えてみることではないかと思う。生命だけが維持されればいいのか、人生の中で災害に遭うとはどういうことなのだろうか。一見、迂遠な道ではあるが、防災の重要性を闇雲に語る教育よりは深みが増すのではなかろうか。

論点4：共助から始まる

阪神・淡路大震災以降だろうか、防災を語る際

に、自助・共助・公助というフレーズがよく使われる。自分の身は自分で守る（自助）、お互いに助け合う（共助）、行政からの支援のあり方を考える（公助）といった言葉で語られることも多い。もちろん、どれも正しく、防災にとっては必須の考え方であろう。

しかし、その3つの「〇助」の割合を考える際には、多様な考え方があるようだ。自助があって初めて共助があるとか、公助には限界があるから共助の仕組みを整えようといった具合である。これは、人々の社会に対する考え方や政治的な信念に基づいているから、それらを変更するにはかなりの議論が必要になる。ただ、将来の防災教育を考える際には、避けて通れない議論でもある。

そこで、将来の防災教育における論点の1つは、自助・共助・公助のバランスであると考えたい。筆者は、人はひとりでは生きていけないという単純な前提から出発してはどうかと考えてきた。いわば、防災教育は、最初から共助を中心に考えてはどうかという提案である。もちろん、そんなことはない、自分の命を守ってから、初めて他人の命が考えられるとか、自分が斃れたら何にもならないではないかと、（結構、強く）反発されることは想定済みである。ただ、大切な相手がいるから、自分も頑張るということもある。まずは、相手を考える（共助）、そこから自助が生まれる。このことは、昨今の津波被害想定改訂によって、いわゆる避難放棄者が出ているということとも無関係ではない。何が何でも自助が最優先だといふのであれば、避難放棄者は放っておくのだろうか。いや、そもそも障がいをお持ちの方々に自助最優先と迫るのだろうか。考えてみるべき論点だという所以である。

論点5 悲しみから考える

筆者は、「自分の住む地域だから防災に取り組むのは当然」という語り口に、どこか寂しさを禁

じ得ない。阪神・淡路大震災を経験した者の一人として、また、新潟県中越地震や中越沖地震、東日本大震災、そして、熊本地震の被災地で様々な方々と交流を深めてきた者の一人として、何か大切な事柄が忘れられている気がするからである。

それは、一言で言えば、悲しみである。確かに、悲しみと文字にしてしまうとどこか違う気もする。悲しみ、哀しみ、愛しみと漢字を変えてみても、griefなどと言語を変えてみても、うまく表現できない。あの日、筆者の住んでいた西宮の街は圧倒的な悲しみに包まれた。そして、それはずっと筆者自身の中に流れ続けている。地域で防災を進めるのはなぜか。それは、悲しみともう少しうまく出会うためであると言えば間違っているだろうか。

将来の防災教育を考えていく際には、ここまで挙げてきた論点が検討されていくことを期待したい。しかし、そうした議論の際に、まずは災害に遭う悲しみについて、学び直してみてもはどうだろうか。例えば、災害を題材にした展示施設は各地にあるが、ともすれば自然のメカニズムの説明が中心になっていたり、緊急時のグッズが所狭しと並べられていたりする。それもいい。しかし、それだけでは、悲しみがつい果ててしまうと感じる。まずは被災することの悲しみがどこかで分かち合えれば、自ずと地域防災への姿勢は生まれてくるのではなかろうか。

そこで、将来の防災教育における論点に通底する姿勢として、悲しみから考えるという姿勢を挙げておきたい。これまでは、どちらかというところ、防災教育の普及といった観点から、誰でも参加できるとか、楽しく取り組めるといった視点が重視されてきたように思う。本稿の冒頭に挙げた筆者自身が災害NPOと一緒に取り組んできた活動も、こうした視点に支えられている。無論、今後も、楽しむという視点を踏まえた防災教育の重要性が低下するわけではないし、さらなる工夫を重ねられて行くべきであろう。しかし、そこに災害に遭

う悲しみが含まれていけば、ここまで述べてきた論点も、少し異なる色合いを帯びてきはしないだろうか。悲しみをどのように表現し、伝えていくかは、将来の防災教育における大切な論点だと思う。

おわりに

本稿では、将来のための防災教育について展望を得るために、防災教育の原点に少し立ち戻って、

いくつかの論点を取り出してみた。他にも大切な論点はあるだろうし、そもそも防災教育の現状では、こうした論点を議論するよりも、まずは実践だという声も多いかと思う。ただ、防災教育の将来を考える場面、あるいは、現在の防災教育が何らかの行き詰まりを見せていると感じる場面で、ここに挙げた論点について考えを巡らせることが、次へと進むヒントの1つになるのであれば、幸いである。